



里見八犬傳  
九輯  
四十七

1冊  
600  
285



14  
600  
285

南總里見八犬傳第九輯卷之四十七

東都

曲亭主人編次

第百七十八回

有種恥を雪ぐ郷黨を復歸せ  
大水陸小衆鬼を濟度を



是より先小犬山道節忠與も。十二月八日の黄昏時候河奇矢口の河原小定  
正の援兵ある。巨田助友と戦走らず折印東明相荒川清英等の意見小任  
せん。故の海邊小退く程小馬淵場九郎が残兵及近郷る。豪民の子弟毎  
ぐ多く走至加りて既小多勢小作りり。姑且其里小人馬と憩へ。且當晩間  
謀見をりて五十子の城の虚实を現せ。小那里へ夙く大阪毛野が江を渡り來つ  
城を抜く威勢正小破竹の像く。當家の旗を四門小建て紛ふべくもわらぬ  
との小道節聞て且歡び且羞く。明相清秀等小のりぬ。皆ね又智囊が逸早く



柱のべに只雑蟻を散らさる像く。逃く四空八落小做さる。我々も手も滞さる。當  
 城を獲て守るの事。勿論那義ハ生拘の敵兵小少く所あり。と告る奴らも所く  
 明相清英憶ももうも合兵れて事の便宜と大坂の軍界智計と感嘆も并が  
 中。小道節ハ連り小耳を敵けて。果て且つ小争。現小兵々拙速を責ふべし。久  
 老巧あると良とせば大坂が為す所ハ速小く拙かき。咱等ハ昨宵愁小。中途  
 より走加さぬ。兵毎小拘つらひ。時後とぬ。悔一さ。然らんハ忍岡をも。亦  
 大坂小先せられ。欽といふ。高宗推禁めて。否とよ。忍岡の城攻の事ハ。昨宵咱  
 等グ薦ゆかども。大坂主従を。那里ハ和君小譲らん。と。士卒紛け。伐せ  
 め。然れば亦五十子。這城内ある落武者の威。忍岡へ。集合け。然ら。那里ハ  
 大勢多ると。告ると道節。彼も。好々我々。ろひ。暇まう。と身と起せ。バ  
 明相と清英。又高宗と李元。皆小別。告て相従ふ。留め難。高宗李

元猶も太向の小心を願ふ。とむり。小門内。ま。を送り。然れば亦大山道  
 節。大塚の城を退死。と。并。儘老兵士卒に。意衷と示。大坂既。忍岡  
 の城攻を。咱等小譲らん。といひ。縦。那城五十子。大塚の落武者。等。加り。て  
 幾千。幾萬人。盾。籠り。防戦。とも。今日。我。一時。小踏潰。さん。各。粉骨。推身。して。  
 我を。佐。けて。大功。を。做。し。ね。卒。と。く。とい。は。せ。其。明相。清英。の。は。は。さ。し。卒。咸。諾。して。  
 勇。も。其。隊。配。小相。従。ふ。明相。清英。先。鋒。たり。道。節。ハ。中。軍。を。て。二。の。老。兵。小。頭。人  
 を。後。陣。と。も。隊。伍。齊。々。整。々。と。不。忍。の。池。の。那。方。ある。忍。岡。の。城。を。投。て。ら。ち。向。當。目  
 礮。川。湯。島。の。間。を。森。々。る。岡。山。中。へ。処。々。小。懸。糸。り。拉。さ。る。冬。青。樹。小。路。を。太。あ。む。む。  
 既。小。之。大。山。が。一。軍。ハ。湯。島。越。過。ら。ん。と。志。ぬ。時。道。節。ハ。馬。上。より。去。向。と。佐。と。見  
 且。之。急。小。先。鋒。の。士。卒。們。と。喚。止。め。且。宣。示。さ。る。我。今。前。面。の。茂。林。を。見  
 小。正。ハ。是。隱。々。と。立。升。る。殺。氣。あり。意。ふ。小。敵。の。伏。兵。わ。ん。疾。獨。出。て。撃。ち

捕りねと誨る詞も果ね折る。件の茂林より忽焉と威聲大く發りて、鼓子必ま火銃の煙と俱小頭ま出。敵兵約一千有餘、真小找む其隊の頭人烏革絨の鎧小同絨の五枚首甲の火形打を猪頭小被做し、腰小木小二口の刀を跨へて馬を跳せ鎧を拵て四下小响く聲高やう小里見の葉武者們胆を潰しを角谷殿の御内中忍岡の城の頭人根角谷中二麗廉這隊小在り。先度の恥を雪まきむ本事とんやと喚れ、左右小從ふ西個の小頭人赤耳九二郎當場阿太郎士卒と駈く三七二十小殺類さんと競る。蒐まハ明相清英毫とも謀む徐々と士卒を找めて中を割せむ、左右とも較む。道節も亦是と助けて息をも養む、挑戰ふ左右の茂林の方より又起り立二隊の軍兵箕田馭蘭二韭見利金太布留川淺市甲乙三騎其兵約莫一千許道節が備の真中へ吐と嘯く推蒐る。道節謀む用合せて右小引受け左小拵て士卒を使ふ小手脚の像く毫も透間あつてさへハ明相と清英ハ是小

俱小頭  
深木

氣をひくを推く。閉戰園る折る。後陣のハ小又敵あり。是則別人を。大塚の城の頭人友橋雜記丁田畔四郎が其隊の残兵四五百名と真先よ找え、犬山の後陣を較むと急る。けれハ道節が其隊の老兵小頭人も皆駈れ慌て返し合まる小暇なく。這隊より去る敗れハ是小敵の威勢をひく前後左右揉合せ。漏きとぞ攻戦ふ鋒尖銳かりる。道節の物ともせむ。馬を前後小馳融し。又只左右小相中りて鎗りて敵を刺す。武藝驍勇向ふ小前多一人當千。いそぎもあつた犬士小誰う克つ者あらん。箕田馭蘭二韭見利金太憶む。辟易を俱小頭。疾を負へ。其隊の兵們潑と頼れ、風小木の葉の散る像く。鋒を倒る。逃ハ道節も又奮然と後陣の敵小突蒐る。本事小做ふ老兵小頭人取て返しつ刀を勗せ。皆只恥を雪んと思へぬ者も。ハ勢小友橋。由が五百の士卒の霎時をわれ、悚難て逃んとさる。度と失ふて較むる者多り。然ハ又印

大塚傳七郎

四

大塚傳七郎

東明相荒川清英。這時も根角谷中二赤耳九二郎當場阿太郎等の一隊と  
 挑戦ふ程小左右後陣の敵兵も威道節小撃破られ立脚も多し。敵の  
 頭人谷中元二郎士卒も俱小驚怕まて。呀と叫び敗れ走るを明相と清英ハ隊兵  
 を馳せ攻伏多。明相ハ根角谷中二小鎗を合せ多と疾く馬より撞と突落も其間  
 小荒川清英も赤耳九二郎と刺し。又當場阿太郎小を疾く猶も雙て敵撃  
 這壯伎等の拵死小躬方勇と後れんとと怕と敵影と躲と迹と埋る。闘戦風く  
 果し。道節ハ開く儘小馬を樹下小騎居。士卒の集合ふ候程小印東明相  
 荒川清英も生口根角谷中二と雜兵小牽せ来て。その餘敵の小頭人赤耳九二郎  
 當場阿太郎と喚做と兵毎深疾小堪ぞ死し。其首と捕と云。又道節  
 隊小生拘る。其田馭蘭二ハも深疾小のり。非見利金太布留  
 川浅市及橋雜記丁田畔四郎等ハ或ハ撃れ或ハ逃亡。敵一人もむび多し。當下

道節ハ明相清英等。今日の拵と誓て且のり。我聞箕田馭蘭二ハ五十子  
 の城の留守居多し。又及橋雜記丁田畔四郎ハ是大石が兵頭小。逃く大塚より  
 来はる。又根角谷中二赤耳九二郎當場阿太郎等ハ則忍岡の頭人然るて  
 五十子大塚の城の落武者等。谷中二と一隊小做り。我ハ中途小撃せし。一  
 所以のる。猶も思ふ小谷中二ハ間諜をり。我去向と知り。情地小城を出て  
 這頭小埋伏し。我ハ撃多し。欲する程小馭蘭二雜記等。西城の落武者毎ハ料り  
 む其首小落合て却大勢小做りたる。と。明相然と答へ。現小推考  
 然もいぬ。愚按いぬ。敵の遺せし旌旗戰幟われば開せり。根角谷中二が  
 かへり来ぬ。と。伴と忍岡の城小造ら。城兵必欺と。城門と開て吾を容れん  
 と。清英もその義善と。登時我ハ先小找と。小唾く城と捕へ。いそせぬと  
 薦と。道節頭と。揮て其計畧及小あねと。根角が殘兵脱還ら。城兵



敵く我詭詐と知りん且野干王の鳥夜るる其計畧行はせり非如敵の旌旗  
 戰懺り。揣らま欲するとも。今這白晝に城小益まへ面善見のる故。城兵  
 必疑ふべし。然危き技とせんより。今谷中二取蘭二等と明明地小曳吊ぬれ。見せ  
 城兵等と罵て權さ。城兵必害怖ま。我小降らん。倘又城小猛者わく防戦ま  
 欲するる。筋力と是と捕らん外小援のる。城之踏潰ま小の障没び。卒  
 ちぞと馬と我れ。明相清英の議小任して。既小半生半死の谷中二と取蘭  
 二等と雜兵小吊らせ先小立。明相清英先鋒。道節も推續れ。三千の兵  
 前後と乱さ。既小く忍岡の城小迫づ。來ぬ程小。正門の塙の内城樓  
 の下小中黒及揚羽の蝶の花號添做。旌旗騎馬表と幾流り。建さ。寒西北  
 の風のま。翩翩る光景小他。甚麼と。わたり小。明相清英の。道節  
 並小徒兵們も眉と擲め。疑惑ふ。思ひ難。開が中小。道節入を。明相

清英小い。今這忍岡の城小躬方の旌旗と建。只是我を惑。敵  
 の計策る。然亦智王。薄情。我と脱。技。風。這城も攻捕。且  
 城小向て名告喚り。那虚実と。この小。明相清英の。馬と正門の橋。近。騎  
 我め。聲高。小。鳴。や。城。内。の。人。々。小。の。い。ん。這。城。の。頭。人。の。敵。躬。方。欽。あ。ろ  
 び。が。我。の。里。見。の。防。禦。小。頭。人。印。東。小。六。明。相。荒。川。太。郎。一。郎。清。英。是。之。這。隊。の。防。禦。使  
 犬。山。道。節。主。の。武。勇。を。の。方。僅。來。ぬ。中。途。小。當。城。の。頭。人。根。角。谷。中。二。及。五。子。の。城。の  
 頭。人。箕。田。取。蘭。二。等。と。戦。ふ。且。疲。負。せ。生。拘。り。を。牽。せ。來。ん。這。里。小。在。り。門。を。開。ん  
 迎。へ。ま。と。繰。返。し。呼。び。城。兵。等。の。心。と。答。へ。先。挾。總。と。開。き。左。見。右。見。る。と。半。响  
 許。航。城。門。を。開。せ。頭。人。と。不。意。武。者。葱。白。絨。の。鎧。小。鍔。打。釘。總。頭。の。腰。衣  
 穿。て。短。小。締。做。黃。金。製。作。の。大。刀。を。佩。於。頭。鎧。を。從。者。小。持。せ。る。が。士。卒。二。千。名。許。と  
 從。て。遠。く。出。來。つ。る。名。告。答。る。や。犬。山。主。那。里。小。在。る。恁。の。我。の。落。鮎。餘。之



七有種ふていぞと報知せり。近づく程小相と清英の豫知。那人欽思ひつどと  
なかりふ引て道節小逢されば。道節の遠く馬より閃りと下立く。おろ落點生一別  
以來恙者和殿の亦幾の間小當城と攻落した。料りざりたる對面こそ其所以ま  
わしけとて向ひ有種さい小可が出没の言一朝小聲しつる。先城内へ俱しはらん馬と  
憩ふひねと答て却明相清英等小名對面より勞ふて引て城中へ請まれば。道節ハ明  
相清英等と俱小我入る程小自餘の老兵小頭人們も士卒と徐小練入まで三隊小別  
れて東西小聚ひて乱雜わつる。恁而落點有種ハ道節及明相清英等を誘引て  
城の正廳小造る程小五十有餘の法師武者と落點の家の老僕小ヤニと穂北の故  
老們出迎へて上坐小請待多。實主の席定りて存火の火盤と鷹め且前茶看める  
とどき當下道節ハ有種ふらち向ひて。昨日洲寄の澳の水戦小犬阪が計畧とて大  
敵と血みまける。の始ゆあり。道節が敵の副將朝寧を射り水中小隊まらる。又

河昔河原小定正と軒敷。一時巨田助友が援兵のり又さく來ぬ時湯島も  
岡山と根角谷中二箕田馭蘭二反橋雜記等の三城の合兵と閉戦克て谷中二馭  
蘭二等を生拘て奉りて來つる。の終りて其奮を説示して却落點が上向ひ  
有種はさる毎小感歎せむとりのをさる。義成の武徳仁政二天士の戈畧武勇と譽る  
る大方ある。小可が上へるも首とてハ箇様々々尾ハ又恁々做りとて言詳み説出を以  
道節明相清英等の齊二耳を敬へ俱小佳境入りある。其顛末を尋ねる。初落  
點有種ハ扇谷の討隊の頭人箕田馭蘭二と根角谷中二が勇勢と領ちる。向ふと  
攻へ時妻の重戸が諫めありて。急と郷黨小告知せ穂北の家と自燒る。郷人と咸  
相伴ふて重戸の叔父のいまをかりけ。下總の國後嶋郡誼夾院村へ赴きて那小  
父小危窮を告て推且這里小潛び居り。抑當村小誼夾院と喚做し。一座の  
修驗院ありけり。住持ハ豪荊とて山伏也昔ハ子院四十八ヶ寺あり。小近世痛く

衰へ今日本山の事れども。其餘波近郷小在り。皆半僧半俗のく。武藝を好む。且  
 各々耕し耘りて。の口と餉へども。尚本山の事わ。時ハ四十八院咸集ひて相資けむと  
 つのこる。況て豪前法印ハ其性物小任侠め。法師小似げる。腕扱るれば平生小  
 弱死と助け。強きは折死人の不平と解ま。然る今落鮎夫婦が寛家の為小地を  
 棄家と焼た宅着を携へ郷黨と相付め。情地小あ小尋ね来り。事の難義と告  
 知せむ。其資助を憑こ。ハ豪前ハ推辭氣色る。最精悍く。曾待く落鮎の  
 宅着へち。之穂北の郷人开が妻孥子弟を西東小潜せ。是を舎藏と五  
 六角小做り。比忽地角谷定正の里見と攻伐のゆきて。内頭定と両旗小且諸  
 侯を連ね兵を合せ。水陸よりち向ふと云。大兵約莫十萬餘騎陸へ行徳國府  
 臺水路ハ安房の洲寄と投て攻寄と。風聲あり。其言言血浪る。され有種之  
 敬焉。憂ひて情地小法印豪前小意衷と示と談む。や。里見殿ハ早裏小我義

折

父水垣夏行翁の老病小臥。折東西賜る。恩恵あり。然らるも彼大士ハ咱  
 も幸小一面の交を辱くと。升中。小犬山道節忠與ハ原是煉馬の殘黨。且ハ  
 我舊君豊鳥殿と。同宗の家臣。りた。故小早裏。那大士の每幾番。我小  
 薦めて。里見小仕へ。といれり。其比ハ水垣翁の老病を看放ち。且公羽が  
 閑發相傳の田園と棄て。他郷へ移ら。の本意。果さ。りけ。小幾程も  
 る。禍鬼起。穂北を棄て。走る時。安房小赴きて。犬士小就て。里見殿小仕。と  
 人のつひ。と。然。一介の功も。身の措。安房へ。い。さ。竟小  
 這地小来つ。余。今里見殿小大敵あり。危窮存亡の秋と。報恩。此  
 義小及。勇士の本意と。身一臂の力を。我を幫助て。軍功を。上  
 と。其功。里見殿小仕。二。家を起。這義誰何と。請。向。豪  
 前。と。听。莞然。と。和殿の情願。極。佳。里見殿ハ賢君。且仁政の

先間諜見をのり。寄隊の来方を撈るべく子院の甲乙穂北の郷人を召集へ他等が  
 意見を受けべしとて次の日件の毎を招鳩めくか。美と告ぐ意見を伺ふふ。大家死をのり  
 資んとて各神水を啜り誓言ををる。悄悄地軍陣の準備を成し程の十二月の初旬不  
 るりぬ。その時豪刑を遣へたる間諜見かり来て。寄隊の来方を報ると。彼く小陸  
 地へ國府臺へらち向ふ寄隊。西大將ゆき。如此々々。又里見方の義通君を大將ゆき。  
 大塚大飼防衛使より。又行徳口へ如此々々。洲崎へ筒様々と三所西敵の交名を  
 せぬ。随み報みり。登時有種は真家刑們小談ぶる。今我義旗勤軍の届る  
 所洲崎へ路遙ふと。事の急小逢ひぬ。行徳國府臺へ便路ふ。且速く。且  
 就中國府臺へ寄隊數萬の大軍ふ。頭定成氏西將る。況く里見方の義通  
 君大將ふ。大塚大飼防衛使る。這隊ふ。就て軍中を盡さん。然りとて事をいとく

たる不慮の軍陣る。故ふ左小右小東西整へ思ふ。似だ日を過し。十二月八日の早天ふ  
 有種并小法印豪刑を両頭人ふ。四十八院の山伏穂北の郷黨と。子弟小至は。を  
 壯る者二百五六十名。甲冑器械は。庭席小裏とる。各々是を搭駝へ國府臺を  
 投く。いそいそ。路近か。ね。時移りて。その日申の左側小國府臺の近村。来て。彼  
 隔昨日ありの閉戦小寄隊。酷く。うち負く。今日。由。内許。我の両將。へ。落。て。飲。較。れ  
 なる。飲。敵。一人。も。わ。ざ。る。ぬ。但。里。見。の。防。衛。使。の。い。ま。當。城。小。り。来。と。の。其。言。疑。ふ。之。由  
 わ。糸。有。種。豪。刑。の。下。ら。ち。這。隊。の。僧。俗。忽。地。小。望。を。失。ひ。呆。れ。果。て。い。ふ。せ。ま。と  
 うち相譚ふ。有種一霎時。沉吟。閉戦。既。小。事。果。て。今。ら。城。小。參。る。と。言。鄙。語。云。閉  
 諍。の。後。の。棒。三。味。只。胡。慮。小。做。ら。ん。の。を。因。て。憶。ふ。小。寄。隊。酷。く。うち。負。く。性。方。由。知。ど  
 做り。と。の。約。莫。豊。島。小。在。る。所。の。敵。の。城。に。士。卒。咸。耳。怕。く。脱。路。を。見。る。る。就。中  
 忍岡の城の頭人。我郷黨の怨む。根角谷中。麗廉。る。と。名。他。貪。ま。く。飽。と。る。

民を虐はて罪をたて殺せしと大魚の細鱗を呑ぐ如く其惡は其田馱蘭と伯仲を  
 先や今宵那城を攻落し谷中二を生拘へ大塚石濱の西城を攻むとも必落んぬ  
 我什麼と請問へ大家ひらく諾みて開き究竟の使直る。然らばつと矢研の  
 河も宮門河をもち渡りて不忍の池の畔に來ぬ程の夜に丑三不做起りぬべし。酷く  
 走りしとるは寒夜も皆汗ぬる堪む喘を止めて這里那里不立休ひ又相譚  
 ふふ豪荊聲を悄しく今這小兵をりて城を抜まじ欲するは助力をりて勝を取  
 る。其計策の箇様々と詞急迫しく叫れ示せ六有  
 種自餘の僧俗も少く者欵さるる甲小僧くこふ乃今。大家其意をいさうし六  
 有種豪荊のささるる躬方の僧俗二百五六十名搭駝來りて建裏をむむ各解  
 披たて武器の身を固め大刀を跨器械を携て齊一脚を乱ら。走りて忍岡の  
 正門不造りて城門を敲る聲震立て。やをて城内の人々誰うわ。今日の闘戦利

わるむとて行徳并小國府臺を總頼まふ做りし御方の士卒幾千名欵陳没去  
 たる開が中ふ御曹司朝良の幸ふ一方を殺啓きて目今當城不渡らせり。さう迎  
 奉らむとと線返しらいとさあけり。この時這忍岡の城兵們行徳日寄隊の士卒  
 幾名欵方僅ふ脱れ來て寄隊敗軍の為体朝良の辛くして近習の士も資ら  
 れて西國河原の方ふ落させぬ御往方を知むとの城兵是ふ驚譙然頭人根角谷  
 中二小告知せ立頭當場阿太郎赤耳九二郎小頭兎栗專作等うち集合し商量する小  
 谷中二のゆり。里見の犬士を勝み兼て當城不逆寄せ其人等もね這城ふん防戦をも幾  
 まる柱免所詮敵の旗の見えぬ間小宅着を穂北の別荘落し遣りて後易く進退  
 せんを猛可小城内の婦幼小老兵を隸とて悄地小後門ありぬ遣りける事慌  
 走折るふ今又定正の嫡子朝良の敗績して行徳より脱と來ぬるとはく者誰う  
 驚き入慌て城門を用むとせ。這隊の小頭人兎栗專作吐嗟とたり推禁め之答ね

兵每非如御曹司の渡らせあふ。野下王の夜小甚麻とやいも。虚実を管さばい。大  
 門を閉るやある。先御曹司と二の近羽目と容まらせ。後小を御伴當と饒へれば。角門  
 よりさくと下知小門子心をあら。卒先郎君入らせあふ。このひり角門より。衝入る者も別人  
 るも。落船餘之七有種と誼夾院の住持法印豪刑及其徒弟兩個の勇僧突面  
 坊豪的師枕坊豪普と喚做。武勇劍法覚ある。四人齊一腰力を技く。子見其  
 守門の雜兵四五人研仆と返せ。刃小專作が片腕托地と釘かけて研られ。苦と叫びも果む。  
 鬨居小撞と平張けり。是小を駭怖る。衆兵敵あり。敵ありと喚りて逃る。透さば。起龍と  
 研仆。又所散を其間小外面多。僧俗二百五十名。角門より。網入る。豫て準備小携來る。  
 中黒の旗豊島の旗を九尺柄の鎗小結附。突と推建。聲高やう。小里見の防禦使  
 犬川犬田が先鋒の頭人落船有種小在り。新附の修驗者誼夾院豪刑小在り。  
 と名告被け相喚り。二の城門投て攻入る程。根角谷中二赤耳九二郎當場阿太郎老兵

頭人既小皆鬼胎を抱きて宅眷と落せ。折る。小果して敵の逆寄とて。大川犬田落船と  
 咸城内小攻入りけり。名告諸聲。聲えり。いり。驚馬はすも。怖と柱一柱。防さば。良校  
 响子小群島の發と立。像く後門より。群を突て逃おれ。城兵約莫二千有餘。勇小不  
 推並て。うち續たて。逃去りけり。然る落船有種。思ふも似む。城兵の腕く。骨を打て  
 も。今立地小怨を復し。會松首の恥を雪の。豪刑と俱小躬方の僧俗を勞ふて  
 敵捕る所の敵兵を突檢さふ。當城の小頭人穴栗專作を首めて。刀瘡見死人七十名。これわりの。  
 這餘の皆悉落亡。一時小城を獲りけり。丹中穴栗專作。深疾ふれ。いも。死るも。  
 他根角谷中二箕田取蘭二等。同惡め。民を虐げ。非義を恣に。老る。奸賊。死るも。  
 儘緊く。結せ。且城内を展檢さふ。小婦幼も遺る者も。米粟尤も。あり。馳て四  
 門を守ら。却牢會の。世智介。并小梨八夫婦。及種抄隣村も。莊客と其妻子。弟  
 罪多く。緝捕れ。者三十名を扶。出。他等。久く。禁獄せ。且呵責の。苦。堪。り

けは皆半死半生ありしと幸小命恙なけし有種豪荆勅り慰め準備の基と  
 與へるごも皆兩室臥あめ火をとり那身を湯めり六世智介梨八夫婦のささ其  
 毎推まぐ墮獄の餓鬼が佛菩薩の救ひをいさじ地と皆感涙を落すま心小飲  
 みるるりける開か中世智介の量小小才と共侶小主の密使小立一時梨許立寄す  
 とも酒乱小己を忘れて那禍鬼を惹出さしより落船一家隣村の莊客ま其餘映小  
 遇せざる罪輕なふわねども只是一時の口過小く素より悪意ある者なれ有種今を  
 深くも憎まむ口其以後を警懲と療養餘の人小異なるね世智介八且怕且感服  
 志に聲を吞り泣小け介程小根角谷中二赤耳九郎當場阿太郎等二千の城兵あり  
 るが防戦ふ心も慌て城を逃去るものう又思ひ後難の怕れあり徑小五十子の  
 城小参りて箕田馭蘭二等小力を勅と那里小敵を待小て其方を投て行程小又那  
 箕田馭蘭二ら大阪毛野胤智小鈍も城を攻落され罪見利金太布留川浅市等と

俱小城兵多く從へく這方を投て來ぬ小逢ひけり又只是のまわ小大塚の城の頭人  
 及橋雜記丁田畔四郎等小主宅眷小相俱と城を落て來小けり谷中六秋小今這  
 二隊の幫助を借りていふ又忍岡の城を令復えんと馭蘭二雜記等小商量さる小雜記の  
 亦この謀を好して然俱と女性達を五十月の城遣て後安く做さんと主の意  
 重憲儀の妻子と己等が宅眷小老兵八九名を從せて那里とて落遣程小但見不  
 西北のこよりて來ぬ二隊の敵兵あり其頭人正小是犬山道節忠與と谷中馭蘭二  
 雜記等の夢小も知む只是鳥合の野武士等小御方の敗軍を安知りて或は落人を刺  
 畧く或は城を攻破りて不義の利を欲さるる先那奴們を撃捕りて其威勢小  
 乘してこそ忍岡の城を令復えんと三隊を分ちて四所小埋伏をまてけり小多道節  
 明相清英等小鼓を破られて刺馭蘭二谷中六生拘られて這里小牽まら利金太淺  
 市雜記畔四郎等小其隊の每共侶小撃れり欲逃る欲存亡知を做りて然ど

今落點有種。天山道節不鮮知せぬ。那身の来方豪前が義侠及當城を攻落し  
 るるの顛末又告の敵兵の招き知られず。根角谷中二箕田馭蘭二及橋雜記  
 落合の事。都て上の如くおわるれ。道節は毎々感歎の聲を断ちて為小貌を  
 改めて有種に向ひての命。思ふ小優。和殿の武畧豪前法印の義侠胆勇多  
 ぶが美談。哉就て這生口馭蘭二谷中二專作等。年来其君を惑へる榮利を  
 欲り。那民を虐け。罪を害するも。勘らむと。然る今番定正。説薦  
 ぬ。名々の軍を起さず。人をも身をも喪ふ。皆是這奴們群小の致す所。我々異  
 安房へ牽もて参らば。亦是館義成の御仁心。皆免れぬ。知る。今速小誅せ  
 去。何をのよ。勸懲を正さん。權且牢獄に係置。明日八劍小行ふべと。敦圀  
 猛く罵示其。隊の兵每阿と。谷中二馭蘭二專作等。を俱小牽立。退せけり。  
 侯而大山道節。這地の事の趣と。落點有種。の事。洲崎の御陣へ注進せり。

大段も示し合せ。とて。駟。呈書一通。と毛野小與。手簡之遺。自書寫。心  
 利。士卒四五名。小事。信。と分付。件の書翰。を齎。先五子。の城。小造。り。大段。不。別。談  
 る。水路。を洲崎。へ。参。れ。と。之。を遣。け。侯。而。次。の。日。這。豐。嶋。郡。多。壯。客。百。十  
 數。名。穂。北。の。隣。村。多。者。母。を。先。小。立。忍。岡。の。城。小。本。道。節。不。訴。る。今。番。生。拘。せ  
 る。箕。田。馭。蘭。二。根。角。谷。中。二。穴。栗。專。作。我。們。親。兄。弟。の。寛。家。小。て。い。へ。那。身。を  
 賜。り。て。所。切。之。亡。入。の。怨。を。復。き。欲。し。之。の。美。を。許。さ。む。い。は。れ。と。異。口。同。様。小。願。ふ。を  
 道。節。听。り。領。ま。現。小。然。も。わ。む。今。這。時。小。民。の。寛。を。解。せ。も。わ。ふ。善。惡。応。報。の。天。理  
 空。小。似。う。他。們。情。願。小。任。せ。よ。と。隨。即。馭。蘭。二。谷。中。二。專。作。を。牢。舎。より。出。さ  
 せ。其。莊。客。們。小。拿。ら。よ。小。檢。使。の。主。卒。と。遣。え。大。家。都。歡。び。勇。と。則。馭。蘭  
 二。谷。中。二。專。作。を。受。合。り。の。牽。立。駟。城。外。小。牽。せ。其。罪。を。責。罰。り。馭。蘭。二。谷。中。二  
 專。作。を。一。個。々。小。誅。せ。先。を。所。落。し。胸。を。劈。れ。大。小。腸。を。裂。せ。竟。首。を



有種豪荆  
 夜忍岡の  
 城を抜く





擊落ま小猶怨盡うたがひ壯客の悍はげく壯たけなる者母其穴を咬かむむり。檢使則其首三  
 級を梟首うしして速近すみ示しる。觀者目毎小増まの如く愉快よろこを稱ほえけ。の時世智  
 介梨夫婦り并な不ふ穂北ほくの隣村人の牢舎らう小疲つかる。病臥やま者母其疾病しや瘧ま果は六  
 道節則其村人小是を渡わたと皆其家小還かへることをしる。大家其再生さいの因いん拜はい多おほく  
 喜悅よろこの聲こゑ洋洋やうやうと耳みみ小盈あふく。民の父母ちちと稱なえけ。この目法め印豪いん荆けい有種あり道節だう明相  
 清英せい善ぜん小別わかを告つ具ぐ令しやう下總げ小猶落おち船ふねと穂北ほく人們の宅うち眷けんむ。野の納のう多おほくあ小留とどま  
 くの身の暇ひまを賜たまへといひる。有種あり道節だう今いまさらし禁難かむがた則其意そのい小任まかる。道  
 節だう口管くち小其軍功きんこうを譽ほむ。和僧わそう今番いまの拵しやう小勇士ゆうしも及びおよぶ。死所しじよ之異その日ひ寡君かきん小  
 元上もとる。恩賞おん望ぼうの隨したがふ。と其そのあつつてはままれは豪ごう荆けい是こゝをあむむいいるる。然しかるる望ぼうを  
 せん落おち船ふね俗縁ぞくあり。義ぎ小仗たす所ところ已やむ。聊ちやう小力ちからを勸すすむ。為な小怨うらを復かへる。のこ  
 其美そのの本意ほん小むむ暇ひま票ひょうと身みを起たて。二百有餘ひゃくの黨類たうを感か召しやう集しゆ令しやう合ごうへをぐり立たて。

俱いと誼ぎ文院ぶん村むら還かへり。成なり與よ信しん者ものをあららるる。是こゝのの後のち近ちか郡ぐん近ちか郷きやう多おほく郷士きやうし豪民ごうの  
 善ぜん小與よと里見りの徳とくを慕こむ。故ゆゑ道節だう隊たい小附つく。欲ほむ。當城たう小來きる者もの日ひ毎ごとく  
 及およぶ。けい道節だうが軍威ぐんい小く壯たけなる。一ひと萬まん餘じゆ騎き小をあららるる。當下たう有種あり又また道節だう  
 談だんむ。當城たう大人おとな既すで小將しやうと。印東いん荒川かうの勇士ゆうしあり。且かつ軍兵ぐんべい小置おかる。在下の下した小  
 居いる。要いむ。小我われ穂北ほくの莊むら。根ね角かく谷や中ちゆう分ぶん是こゝを別わか壯たけなむ。家け作さく苛かむ。建た連れんむ。  
 とこのころ。今いま這時このとき小會あひ復かへる。孰たゞの目めを俟まちむ。明日あした故郷こきやう人ひとをあららるる。那里こゝ小  
 うち入り。敵たか尚なほ殘居ざんる者ものあり。獵場りやうの獸け小似にままる。一個ひとの漏しささむ。數かず捕とる。  
 と憚おそを道節だう勇ゆうと譽ほむ。其その試し是こゝ小志しる。遮さ莫も敵たかを侮あはれれむ。必かなく行ゆむ。我われ五百個ごの  
 雄兵ゆうをあららるる。和殿わをあららるる。送おくる。戰いくさ飯い軍用ぐんの錢財せんざい。當城たう内うち小多おほくあり。和殿わの隨意じゆいと。  
 といふ。有種あり怡悅い小堪たむ。遽ついで退ひる。穂北ほく人ひと等ら小那美なみを告つ。准備じゆん風ふう小整とむ。  
 六次むの目め早はや天てん小落おち船ふね餘あまり有種あり小智ち不ふ梨り八はち等ら及およ穂北ほく四百しよ等ら名な天てん小加勢かの軍兵ぐんべい

五百名前後いんちり不せんご幸せ騎馬きま詩し丸まる甲か曹そう器き抵てい細さい名な狀じやうきぎがが大だい既けみみて有種ありむねの穂ほ北きたの庄しやう小せう近ちかづく程ほどの這ね里のせの根ね角かく谷たに中ちゆう穴あな粟あは專せん作さく管くわんの客きやく眷けんの敵てきを避さて在あるも多おほかり或あるは又また那な奸けん黨たう小せう諛ごん媚びて利りを欲ほむる社せ客きやく賈げ賢けんの家いへを作つくて居ゐるも勘かんろろささり小せう忍にん岡おかの城しろ有種ありむねの攻せう落らくされく谷や中ちゆう二に專せん作さくの道みち節せつが隊たい小せう生せい捕ぼられ竟つひ小せう誅しゆ戮りやくせられと安やす知しりく駭さい怕ぱれ慌わう惑たふひ逃にげ去さる欲ほむる穂ほ北きたの隣りん村むら人ひとも追お蒐さうく鋤あ秋あき金かねをのり較くらむ殺ころすも多おほかりとて其事そのこと後のち小せう復ふく然しかる有種ありむねは於是こゝ是こゝ重おもねても濡ぬる故ゆゑの莊しやう園えんを令しん復ふくけのるる谷や中ちゆう二に建たて備ひ新しんに廬い舎しゃ令しん復ふくくわれ其その身み内うちへ郷せう人にんの分ぶんち合あはせり膝ひざを容ゆるみ便べんりありて四よ喜ぎ登と郷せう人にんを幾いく名な飲いん下げ總そう後ご嶋じまの誼ぎ夾けつ院えん遣せんちる豪ごう荆けい并へい小せう子し院えんの勇ゆう僧そう們だん多おほく東とう西せいを贈くわんるなどとて自みづか他たの宅たく眷けんを召よ返かへせり有種ありむねの妻つま重おもを首くび小せう郷せう人にんの母はは女め房ぼう老らうう杖つゑ携たづんで壯さかんの襖あは裏うら箸しゆ箸しゆと搭せ駝たひ穉こ子この多おほく披ひひて皆みな飲いんむをり然しかれども穂ほ北きたの猶なほ敵てき地ぢるれ大山おほ山やまが如ごと勢せいの五ご百ひやく名な并へいが儘まま這ま頭あたま小せう在ある陣じん七しち人にんくくるまを成なりたり

然しかる時とき下げ總そう葛か飾しやくる國くに府ふ臺たいの城しろ小せう里り見み安やす房ぼう太た郎らう義ぎ通つう朝てう臣しんあり從したが軍ぐんの執しやく事じ東とう六ろく郎らう辰ちん相さう杉さし倉くら武ぶ者しやく助すけ真ま元げん田でん稅ぜい力りき助すけ逸いつ友ゆう繼けい橋きやう綿めん四し郎らう喬きやう梁りやう真ま間ま井い樞しゆ二に郎らう秋あき李り瀟しやう鷲じゆ手て古こ内ない美み容よう振しん照てう俱く教きやう二に弘こう經けいあり就す中ちゆう這ま隊たいの防ぼう禦ご使し大だい塚づか信しん乃の成なり孝かうと天てん飼き現げん八はち信しん道だう是し之し又また行かう德とく只ただ今いま并へいの柵さく小せう防ぼう禦ご使し大だい川せん壯さう介けい義ぎ任にん大だい甲か小せう文ぶん吾ご悌てい順じゆんあり其その隊たいの頭あたま人にん滿まん呂りょ須しゆ五ご郎らう重おも時とき肩かた持もち儀ぎ扶ふ朝てう經けい大だい樟ちやう村むら主しゆ俊しゆん故こ滿まん呂りょ再さい大だい郎らう信しん重おも安やす西せい就す景けい重おもあり武ぶ藏ざう石せき濱はまの城しろ小せう登とう桐どう山さん八はち郎らう良りやう子しあり同どう國くに五ご子しの城しろ小せう軍ぐん師し大だい阪はん毛もう野や野や智ちあり其その隊たいの頭あたま人にん浦うら幸さう助すけ友ゆう勝しやう千せん代だい丸まる圖ず書しよ助すけ豐ひやう俊しゆん小せう湊みなと又また小せう水みづ門かど目め堅けん宗そう也や是こゝ小せう從したがふ勇ゆう婦ふ音おん音おん及およ妙めう真ま曳えい子し單だん節せつ範はん内ない葉えつ四し郎らう猿えん岡おか後ご小せう亦また這ま隊たい小せう在ある又また大だい塚づかの城しろ小せう小せう森もり但た郎らう高かう宗そう木き曾そう三さん助すけ本ほん元げんあり又また忍にん岡おかの城しろ小せう防ぼう禦ご使し大だい山さん道だう節せつ忠ちゆう與よあり其その隊たいの頭あたま人にん印いん東とう小せう六ろく明めい相さう荒かう川せん太た郎らう清せい英えい也や是こゝ小せう從したがふ按あん小せう武ぶ藏ざう小せう忍にん岡おかと唱なる地ぢ方はう云い所しよあり古こ歌か詠えいる忍にん岡おか即すなはち麻ま郡ぐん小せう又また王わう川せん小せう遠えんかむ又また不ふ忍にんの池いけの前まへ面めん湯たう島じまの稍せう盡じん苑えんの出で寄き

をも不忍の名小對へく。その俗小忍岡といひ一名向岡是之。俗稱多を知るべし。間話  
 休題又穂北の壯小落點餘之七有種大山が加勢五百名を領てお小在り。又相模多新  
 井の城より防禦使大村太用礼儀あり。臨時追加の頭人田税戸賀九郎逸時若屋八郎景  
 能是小従ふ又鎌倉小堀内雜魚太郎貞住あり。安房の洲崎の本陣より防禦使大親兵衛  
 仁あり。政木大全孝嗣焼雪代四郎與保東峰崩三春高嶺船員六郎繁足須利禮五郎  
 有數三四的寄舎五郎團平。天津九三四郎員明磯崎増松有親真塚紀三漕地喜助太  
 号是小従ふ石龜次團太越郷三萱野の阿弥七椿村の墜命亦這隊小在り。益壽將義成  
 朝臣大敵敗績の後大江親兵衛が焼雪代四郎等と俱小京師よりかり來り。葛西の  
 閉戦小軍功あり。政木孝嗣門の勇士伴當十數名を將り。昨日洲崎の陣營小参り。六  
 義成主八仁小京師小在り。日の奇談及葛西行徳口の閉戦の顛末を詳小安知  
 了と。或の驚た。或も突れ。賞感特小浅くも。政木孝嗣以下焼雪代四郎及新

下

参り。戦功あり者皆見参を饒さして其忠其義を譽せ。就中孝嗣次團太も。素藤  
 素藤對治の日の戦功あり。且孝嗣が忠孝ある。豫聞召所之今より。天守と俱小當家の  
 股肱と。と名刀一口を賜りける。堀内貞行執達あり。且自行ハ親兵衛代四郎小妙真音音  
 子單節が五十子の城にて奇功あり。多毛野が注進の趣を告知せむと。甲乙の會話を具小  
 せん。腐々々々細々小過さ。言首で漏る。看官是を査下。是より先小東峰春高  
 算船算足が軍師大阪の密策小あり。情地小捕ま。せ。行徳口寄隊の敵將羽谷朝  
 良と。腹力小自の代軍稻戸津衛由充あり。又大村太用が虜小く。ま。敵將三浦義  
 同義武も。義成是を陣中留め。航稻村の城遣。次磨小預け。る。是。内徒をり  
 見。賓客の礼厚と。自母の款待浅く。親兵衛がかり。上。他を洲崎の守將小  
 えて。義成ハ貞行を將り。稻村へ還り。孝嗣與保以下の輩ハ皆親兵衛小従ふ。開  
 儘洲崎小在陣。仁。響小國府臺より。使价を。時風。瀧田の城も受

義実老侯歎ひ大なるを疾見まわし思ひも猶陣中の在るを時々食餌服を賜ふ其徒然を訪せむひけり左右を程今茲も將小暮んとは曩小水陸所の大敵も同日小成敗北の後内頭定上野る沼田の城小在り長尾景春白井の城小在り扇谷定正武藏國入間郡河鯉の城小在り俱小再戰の勢も諸侯離叛是者君志と成えんが義成主則下知と今封内小在陣に要るべしと國府臺及行徳口諸將を皆召返させざる然義通君の大塚信乃大飼現八東六郎杉倉武者助由税力助等と俱小生拘の敵將成氏憲房朝寧為景并小齋藤盛実等を領し稻村小凱陣を國府臺の城小真間井樅二郎繼橋綿四郎潤就鳥手古内振照俱教二宮ありて故の如くあを成まり又今井の柵大川莊介大田小文吾是を破却と満呂須五郎孝安西就介大樟村主肩持兼杖等と俱小生口自亂憲重亂久を領し亦是稻村小凱陣を總兵一萬五千名騎馬武者歩兵列を正し甲冑華麗小齊々たるをといふ者なり

ふれども生拘の人々皆是冤家多し貴介公字二城の主將之囚徒をのこさるるはと狂言小數間の房屋を造立之其第一の房小成氏第二憲房第三朝寧第四自亂第五為景の房と又憲重亂久盛実各其主憲房朝寧自亂為景と同居せし屏居の徒然を慰むるをわんごといふ又義同と義武の天井を隔る別室置る唯朝良と由充の客房小在らせし宛放免の如く歎待由亦重なりと時大江親兵衛們も咸洲崎より召返して那果の遠見の士卒二百名を置れり義通以下防禦使諸頭人凱陣の次の目小皆召集令義成則正廳小對面あり而茶片茶の礼を行きて這面の軍功を賞せらる荒川清澄堀内貞行も這席小を與りけ當下義成生の家老一老臣堀五太士を身邊近く召させ各いふ思ふならん這回生口の人々皆貴人城主我焉と慢侮せん昔源平の閉戦小平位重衡生拘れ録倉小囚置れ時頼朝對面と其不幸を慰問のまわし其後宗盛虜多て録倉小呈送され時頼朝是と對面

れけ

て九

せど他ハ則大臣の罪人。是時小當頼朝の冠位昇進をねぐ押平家の  
源氏の為は是累世の冤家。上入河の奉為。是驕僭の乱賊。今他を七例  
とまぐらふ。我今主客の美ふりて對面を乞ふ。各意見す欲いふ。と  
と向ま。大家阿とむり。小呷み答るる。け。姑且と天塚信乃。辰相清澄。貞行。皆小會  
釋と。主に向ひ答る。諸老の御業を。皆ぞ。答ま。鳥渡。最憚り。と  
愚意を。稟上。君今那敵將達。御對面の一條。実小寛仁。大度。博愛。至極。とい  
はべ。ま。れ。和を講せ。他々。對面。他。恥。人。愛。心  
を。及。人。辱。事。宜。わ。親。兵衛。の。議。を。好。て。現。成。孝。が  
意見も。愚意も。相同。那人。御仁。心。感。服。の後。小。御。對。面。ま。ま。り。く。い。れ。を。議。を。ね  
貞行。辰相。清澄。及。莊介。現小。文吾。も。大家。是。小。從。て。ま。る。を。答。け。義。成。つ。ら  
ら。所。今。成。孝。が。意見。小。依。衆。議。任。地。の。權。且。對。面。の。義。を。皆。朝。多。の。起。臥。三。の

饗饌何のま。心を用ひて。我。慙。ま。小。客。を。愛。ま。誠。心。を。傳。へ。小。就。中。稻。戸。由。充。  
其。心。賢。良。み。且。人。を。知。り。わ。れ。莊。介。小。文。吾。の。受。る。舊。因。わ。り。と。い。ふ。故。小  
他。を。廣。ふ。ま。る。を。服。大。刀。目。の。外。孫。の。朝。良。の。生。拘。ら。他。必。忠。義。の。為。小。死  
ま。る。を。胤。智。豫。計。る。所。わ。る。を。春。高。繁。足。と。他。を。俱。小  
捕。寄。れ。因。て。莊。介。小。文。吾。を。朝。良。由。充。の。為。小。東。道。と。ま。の。意。を。も。更。傳。へ。下。這。餘  
の。い。任。々。と。言。遣。も。仰。ま。れ。大。家。俱。小。言。兼。と。先。這。廳。果。多。り。任。而。又。義。成。其  
大。川。莊。介。大。甲。小。文。吾。と。滿。呂。復。五。郎。再。太。郎。安。西。就。介。磯。崎。增。松。を。召。と。せ。復  
五。郎。願。ひ。の。ま。み。滿。呂。再。太。郎。を。り。養。嗣。と。ま。じ。下。又。安。西。就。介。磯。崎。增。松。に。備。總  
角。小。と。這。回。の。軍。功。諸。勇。士。と。拮。抗。を。も。其。亡。親。の。靈。の。致。を。所。致。是。小。奇。と。と  
い。つ。べ。小。を。り。當。家。譜。第。の。家。臣。と。い。ま。る。増。松。の。乳。名。の。い。ま。る。実。名。を。り。小  
わ。る。ま。他。阿。弥。七。と。い。ふ。実。父。の。又。南。弥。六。と。い。ふ。義。父。の。入。篤。実。入。の。義。烈。這。親

八代傳九屏卷四十二

千

大義集二

かゝる個子わの。あをのん名けて有親と。我のあををひよか。と最懇切仰せられ。復五郎親子就介等が熱心ゆゑ増松は是等の恩言に感涙漫漶暗々俱不言養を寧ろけ。其後又義成主大江親兵衛大川莊介と満呂復五郎石龜次團太越卿三西の奇舎五郎須利團五郎等と召か。又大川莊介大甲小文吾と盾持兼杖大樟村主天津九三四郎等を召聚へ。且宣さる。汝達の戦功に既感思食各秩禄異日定めらば。就大義のゆけれも満呂復五郎八行徳小造り之權且那地を治む。石龜次團太越卿三をのん次役と。又西の奇舎五郎須利團五郎國府臺の城の小頭人。其徒空餘人と俱喬梁秋李の隊に就宜く那地を成る。又盾持兼杖大樟村主身の暇を賜り。大方各一口と時服一襲を被け。其地の吏に做され。且其郷黨千百十數名の都て三稔の調貢を免除せらる。又天津九三四郎も身の暇を賜り。身賜の大方時服右不同。其主井理墨の助い。ゆ申を盡す。と仰ら。その他阿弥七陸八

をの召させ。這兩人の望野椿村の邑長に做され。且諸役免除せらる。是も又身の暇を賜り。猶その外功あり者。市川の依助西國河原の向水幸三天枝獨結宗千吉の参らむ。他等の異召させ。恩賞あり。先大際を盡され。是より先大村大角大坂毛野大山道節落結餘之七等。勝軍の趣。各既其注進あり。おみも具み知られ。を又いふ。む。然るに仁君謙遜の心似ける。開戦全勝の勢み衆せ。人の地を奪へ。人の城を奪へ。おみも他が棄て。主る。城を守ら。今茲も日數僅あり。有佳。程小大川莊介大甲小文吾。稍津衛由充を町盛小訪慰め。義成の仁慈の心操を伝。知甘。且。且。深川の関戦。小文吾の心あり。赴ふ。遅り。満呂復五郎が既小逼りて免る。む。軍師大坂の逆。情地。善策をのん。東峰崩三鱗船目六大江屋依介も。課て船を迎へ。捉せ。當目。小文吾。莊介も。復五郎も。知む。敵の援兵。この思ひ。を。と解。示。其。由。充。朝。良。も。亦。

今さら大川大田が報恩徳義毛野が智計を感嘆々々心程恥く思ひ入り。八月由充朝  
良のころに憲房朝寧成氏自胤以下の敗將憲重胤久盛實等ハハ之を境勇萬夫を  
物をもせざり。義同も義武も里見君臣の款待厚く仁かく且し不誠誠意を感服と  
先非を悔ざる者も多し。為小貌を更めて俱に歸降の心あり。定正の賢者を媚嫉し。無  
名の軍を起せしを恨一との思ひけり。然而新の幸立りて文明十年の秋りて着實に  
賤なる某の礼某の式之壽祝の事敏く送ふに益を薦めざる。光陰の過る覺せ  
日影遅々と早晚の暖く野邊の柴鶴鶴軒端より來鳴の梅の成常情過り。左右を程ふ  
二月の初め有日五十子の城あり。天阪毛野の使の雜兵西三名快船あり。乘りて洲崎の來  
着し稻村の城に詣りて毛野の意見一通を呈上。義成則在城の五太士大工大塚大田を召  
聚し其書を親兵衛に讀せしむ。毛野の意見は道々臣胤智既ハ八百人の計畧を  
と水少數子の敵船を燒盡し亦義兄弟等ハ陸少數萬の敵兵を斫りては房總

三州を泰山の安の置り。是豈我仁君の神本意あるや。実己とてのさるの時今仲  
春ゆく。且時正南向とも時晝晝夜等分の美く佛説あり。七日を彼岸といふ。彼岸  
西方淨土之此岸ハ則沙婆み中流ハ是煩惱之是を念念佛者流との日あり。其福を  
修する時ハ則死人成佛の便りとを伏請。大師父ハ課く。自他戰没數萬の王の為  
水陸の施餓餓を修行せしめ。且年來の軍役ハ疲勞。他方の窮民馬兒們ハ米錢  
多く取せしめ。仁政正死を起し。且枯骨交々との名。武藏相摸ハ新井五十子大塚  
忍岡這諸城あり。軍用の為敵の積貯へる米錢。是併氏の膏腴を絞りとる  
者也。且是を之彼施行ハ充て。時ハ失ふが。臣胤智悲泣哀悼の至。堪は誠惶  
誠惶死罪死罪謹言とを書きつけ。義成是をもちて汝等の諷をいふ思を回して  
五太士阿とをわし。頭を低く開か申し。信乃先發。其乃臣等も豫て  
心づいていへり。譚ひい。那珍客の數待。腹をひぞひ。稟上りたり。と

莊介小文吾現八親兵衛も共伴の毛野が意見始り思ひ量り所はく師父を召寄  
 り仰合まをりかとい異局様の請ひの義成然とと黙頭を開け我風意も相同じ  
 大去歳の土月那奇風功成り後毛野使と共伴の洲崎へ入り居るが開き健  
 命寺へ退りておもふも軍方丈の屏居て口の請經の聲を絶せ人ぬ逢せとせたり  
 選莫是等の好事を告るべく我今手書を遣り召寄て這意をひき見  
 然りと使者を走らせく大を召せぬけり任而次の日大法師の二僕をのこ従へく稍  
 村の城の多よけまの義成則五天主を召合せく件の一義の及ぬと大も果と稟  
 けり那四の劇策の臣僧始り好とせむと論ど推辭せ毛野大用が口車載てあ  
 る罪惡を醸さるるも今罪障懺悔の為めとて眞福を修むる公弟と肩を  
 賣るふ似たり人を殺せを不仁と知り始り殺せむと好事をせむふと然れも  
 今に至りての經典供養の力に借らば何をもとて毒數喜重の冤鬼を濟度做を據や

此況窮民馬兒們の米錢施行の經を讀んで死を吊ふ猶勝まり速く御沙汰わりて  
 ありとぞ各々の當下信乃がの今師父今番施餓餓の導師の伏姫の  
 御紀多那水晶の數珠をそ必用ひのけられ其記數の八箇の玉を我々感得せり  
 今に至りて返まつるも兄弟等全聚る當家仕なる上必本返る東西を  
 受けとりの親兵衛莊介小文吾現も共伴の件數珠の役行者の伏姫未授  
 靈宝物のみも然らば今番の大好事の二百八玉具足せこの功徳をり那冤鬼を鎮  
 足りぬべと議事を大いゆわむ否と今番和殿の感の玉に借るふ及む最も  
 不測のゆを館の召ねが最の臣僧谷山ゆ奇風を發る瘡襲の玉囊の藏  
 め懐りて寺へ還りて取せ見ける怪ひの件の手も皮自然と裂破れ内八箇の白玉  
 わりち驚き合抗見るふ亦是其玉毎の自然と頭れ八箇の文字の奇なり  
 べらもわらば件の玉を由ととも合せ讀見るふ正に是阿耨多羅三藐三菩提讀れ



但三の字を玉の箇を先多羅の下貌の上措是を三貌と讀之又菩提の上  
 措更三菩提と讀べ。有信れば一字兩用九言も八至り足れりとを按ずる小瑯  
 代醉篇小阿耨多羅三藐三菩提を成覚と注し三藐三菩提を成覚と注し是則覺正  
 覺を成を覺の義也正覺を菩提と注し又一説小阿耨多羅三藐三菩提は佛所謂  
 仁小同ト人至仁の時必是正覺を成して菩提に至らざる者なり。譬言王子小君仁は  
 不仁者君義を成し不義なり。との如一人の一身五臟の神君至仁の如く脚の是を  
 資者敢不仁を成せしむる。是を阿耨多羅三藐三菩提といふ。是は由て之を觀れば  
 八大士等の感ゆる。那仁義八行の八玉人間所要の至宝なり死を吊ひ滅を濟す佛會の  
 相心ゆはる故不易なる。這八の玉をの今番の所用の故さるる。是は亦役行者の  
 善巧方便なる。然佛法不可思議廣大無量奇々玄妙の事なり。と言詳不説示る。件  
 の玉を識數不串たると。水晶の數珠を取て見せまると。義成主を首ゆ。信

乃親兵衛莊介小文吾現も共侶の其事を听其奇み感んて耳を傾け目を注し稱賛  
 聲を齊くを开が中信心乃かひ有り。師父阿耨多羅の注釋。寔は是精妙ゆ。雅俗の  
 惑ひを醒まふ足れり。昔後醍醐天皇叡山小行幸の折津守國香の歌。契りまはる  
 山も見つ阿耨多羅三藐三菩提の縁を植けん。とよきけるを太平記第二の巻載る。  
 意ふ小國香。阿耨多羅を只正覺を成すの義と見し。今國香を今も世むら  
 せ。師父の諺解を安せる。他其是を何といふ。との親兵衛莊介も。寔は然るり  
 と應り。義成の見渡。數珠を受合りうち戴たり。現小文吾と共侶。其識數  
 玉を見て齊一の感歎も。當下義成主。大に向ひて現小那羅。龍の玉を。邪物の  
 より。邪といふ。邪音風を發せ。至ると我を幫助て大敵を殺し退ける大功あり。其後  
 小玉と變じて。信の奇特を示す。今番。破。餓。餓。の發願。佛意。小稱。祥。め。わ。ん。先。の  
 力を老毎示し。と施行をいふ。と仰ふ。信乃。善。は。あ。る。ゆ。く。然。而。辰。相。清。澄。と。眞。亮。逸。友

考嗣支同席小召聚令。事恁々と傳へて大家其奇小驚嘆と施行の事稱賛を  
 當下養成又課せらる。軍師胤智の意見由今番施行の米錢皆敵城小是くわ  
 則是を以て其所用小充んと請稟し。然れども我今作善を行ふ及び只敵の東西  
 をのち執て其所用小充るべ牙と盾と賣小似て是人の財を以て是を人小施と己が徳と  
 做さ小同ト。我亦這回の軍用小貯る米錢多小わび則甲と乙とを以て。施行の所用小做  
 時。是自他平等利益の義以て真の施行といひ。水小則船を浮め。衆徒請經と西敵  
 冤鬼を濟し陸小則施行し。窮民を救ふ。法會則、大を以て導師た。まめ人の小  
 まもわび。施行と則毛野大用道節高宗李元良。生小課て約莫鎌倉より石濱  
 まで武藏の海邊に彼岸七箇目是を做さ。又下總の満呂復五郎真間井樵三郎  
 其小課て葛西行徳國府臺に施行せん。勿論る。なれども重時秋本堂のよま  
 其人た。ま。行徳本所へも小文吾國府臺葛西の現八俱小施行の頭人として士卒松

傳

おて那地小造りて重時秋本堂小指揮ま。又船施餓餓の頭人親兵衛信乃社介  
 だ。政木大全杉倉武者助田税力助を副せ。這議を夙く毛野大用道節等小傳  
 ぞ。安房上總下總る僧俗小徇知ま。又、大の箇様と。言訂寧小課れ。大家と  
 ぞ。言兼して。その日の衆議の果小けり。却説當日ある。隨小房總る。諸山諸寺の長老  
 道德施餓餓の法會を帮助んと。各徒弟を徒令延命寺小來會ひ。又、房總のこ  
 る。武藏相摸る。老僧智識也。皆このを。修。歩。俱小感悦せま。各安房小推  
 渡り來て法會小與ら。欲さる者。百を以て計ま。大則其徳を推を。試て役を課る  
 と。各差あり。その時信乃親兵衛社介。孝嗣直元逸友等と俱小洲崎の浦小施餓  
 餓船百十數艘を相浮ゆ。件の大衆を分ち載。其中央る。巨船小。大法師香  
 海の法衣小烏綸子の袈裟被て。小白毛の拂子を合れる。打扮華美る。ねども眉  
 秀鼻阜面色威わ。猛ら。宛達磨の後身秋と思ふ。可の骨相小衆僧都て敬



水陸道場  
 施餓の  
 徳民の  
 寛鬼苦  
 與樂に

水陸道場

二十六

文溪堂上



水陸道場

文溪堂上

服之相讓らざる者を以て後方への沙跡念成喝食行童子爐を執り如意を執りて相立者  
三四名讀經の僧二百名左右二側へ排列し船毎に幔幕舷帷を引渡し船頭へ造り建  
る餓餓架あり過去七佛の名號及涅槃偈四句の幡を八隅へ建て三東萬靈の位牌  
あり種々の供物に至りての細名状もくべかくの如し施餓餓船二百零八艘又伴船あり  
齋船あり三三の食膳を掌る者是に従ふ又信乃親兵衛壯介并政木孝嗣杉倉亮  
田税逸友等の身甲の上へ朝服して各船中黒の花號あり白旗を建り前部鎗拵  
尖方を飾指て非常の爲ふ士卒各二百名を將て俱に出海あり其船都て武藏の方へ  
浜りて則墨田河を法會の始とて第一日墨田河より西國河へ第二日西國河より科  
草澳まで是より將次第を追ふ七日の新井の澳より洲崎に至りて結願とを船毎に衆  
二百名六時中讀經の聲蟬々乎乎と蚊虻の群る如くその時陸へ施行のあり相摸  
鎌倉より新井浦河まで大村大角堀内雜魚太郎頭人等と或は城下或は港口に米錢許す

仁  
天  
工  
て  
は  
と  
る

積措て老兵士卒是れ又假名川より高嶽まで大坂毛野浦安牛助千代九圖書助等  
是を行ふ小湊又小水門目範内葉四郎等小頭人等又大塚礪川の邊小森但一郎  
木曾三介西國河原の鱧船員六東峰崩三平三太妻吉を副とて又行徳より本所  
深川の犬田小文吾頭人等満呂復五郎小頭人等石電次團太越卿三等是れ又國  
府臺より葛西重越の犬飼現八頭人等真間井樞二郎繼橋綿四郎是れ又從ふ浦島手  
古内振照俱教二小頭人等又墨田河の西河原石濱の城の下へ登桐山八郎頭人等老兵士  
卒施行小與り從ふ者尠るる又岡山の壘の頭人鳥山真人等も此の這り小與るる  
都這數箇所積措れる米錢の猛可小山のぶら像く斜奴あり檢鈔あり施  
行人別米一斗錢五吾文と定めらる女子と小見の半を取らるといふ夫役の莊  
客其地の村長等相從ふ者枚擧るる違あり介程の六年來軍後小疲れ果く  
家を喪ひ子を售妻孥離散して餓渴不堪る他方の窮民乞見綱草見の老るるを

満  
天  
工  
て  
は  
と  
る

扶け棒を掖た或い赤子を駢敗囊を引提り陸續とて来ぬ者燈見の甘た小聚ふ  
 像く其米錢の多ゆて施さる東西亦過分小胆を潰して感涙を流さるわり  
 きて戦と拜むわりて徳を仰だ恩を謝し其米錢を賜りて還りゆわり来ぬわり彼  
 岸七日を涯りて施さる敢奉らむ受る者ハ嗟来の怨さる今戦世の暴虐の  
 中ハ這活阿弥陀も在せ欵とて喜悅の聲洋々と耳ハ盈ぎる目ハるりけり既を結  
 願の目ハ微りて大法師の施餓餓船を新井の澳ハ經續果之洲崎のこ小漕りて  
 来ぬと隨從の二百余艘ハ相距と遠く道師の船を圍繞りて讀經の聲を  
 衆口の音も只一舌より如く細大音聲口調錯を其聲龍宮城まで暢ふて天  
 衆も越ハ来向て這大法會を資するも江河の鱗介波濤を閉ぢて菩提心を發せ  
 らんとの七箇目雨もどこの日ハ恃ハ海暖く虚空ハ蕭然の風もけり潮水平坦ふて  
 眠鴻流とて幾群の知鳥俱ハ出ハ羽を斂り磯松ハ集る老鶴これハ為ハ求漁らる下

海へ交と入ると見へける那時速く這時速く渦く潮水ハ波瀾逆立く百千  
 萬の白小玉忽焉として立升る白氣と俱ハ中天ハ沖りて宛衆星の鳥夜ハ見  
 くら異るるも又其許の白小玉亦只數萬の金蓮金華と變とて赫奕光  
 明粲然没目と共ハ西ハ靡きく搗銷を如く見へる隨ハ天ハ残る  
 二藍の瑞雲の中ハ音樂吹えて暮果るすを奏々たり今這奇特を自數  
 ず者義通主從犬士の每箱戸由充敵の敗將成氏憲房朝良朝寧  
 自胤ハさる義同親子憲重胤久為景盛實ハ不至るすハ俱ハ傲慢の角  
 折れハ兩敵戰死數萬の亡魂技苦與樂の利益ハ遇へるハ正ハ是里見の  
 仁義とハ大法師の大功德ハわらびと孰りゆべと感嘆敬服せざるハ  
 る為ハ小貌を改めといふ後悔をうけける因ハ憶ハ小甕襲の玉ハ地水  
 火風の四大ありて其風を發さふ及び兵鬪をりて水陸を對治

其り。是其所用四大... 且始ハ八百比丘尼ハ獲られて風を起すと善小  
從火後ハ毛野ハ八百八人の籌策を資けり。是八百の正對るや且阿  
釋多羅三藐三菩提の九言八箇の玉ハ變りてハ萬鬼を濟度の利益あり。  
恁まハ八犬八行の仁義の玉ハ伯仲を初邪物を幫助ハ那宋人の不龜子の  
藥の比喻も似るべし。畢竟ハ大カ水陸道場大施餓饑の本願成就  
を後ハ話説甚麼ぞ。丹々又下の回ハ解分る候聴ね。

作者云前ハ如く。本回ハ暴ハ腹稿の... 時全部百廿二回ハ  
定め結局の題目を措けハ今終るハ及びて題目外の話説多  
ト云はる。故ハ本輯四十六の簡端ハ附録目數ハ條ハ道節  
湯嶋ハ兩奸賊を擒ハる。後見ハ三陳凱旋衆議の段ハ照見るべし。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十七終

其の目相村の城内ハ里見義通御曹司舍弟の君次麻呂殿子ト共侶ハ洲崎の浦ハ  
置れ。望洋臺ハ必多ハ兩家老東辰相荒川清澄又姥雪代四郎白濱十郎朝夷三  
弥七浦二郎滿呂再太郎安西就介磯崎増松等伴當あり又十條五郎十條尺八  
胞兄弟ハ其の時堀内許より召せられ兩君公達ハ見參まらる。扈從ハ君邊ハ在り  
年尚二五ハ足らねども最大ハ一ツ多ク人見ハ譽ぬるりけり。其の折を以て敵の  
敗將許我の成氏主并ハ兩管領の子息憲房朝長朝寧子葉自胤を首ハ  
稲戸由充三浦義同其子義武大石憲重長尾為景原胤久齋藤盛実等  
俘囚ハ做りて其の地ハ在る者ハ鬱鬱散ハる。皆饒されハる。左右の假屋ハ  
在り敬言固ハ士卒ハ小多かり。義通先諸の敗將ハ對面ハて礼ハて親ハ誠心ハ  
舒傳ハるハ懇懇の詞を罄ス。其の故ハ犬塚信乃大江親兵衛大川北村  
政木大全孝嗣等ハ義成主の命あり。船を洲崎の浦ハ返ハて其の日の待客使ハる。



の緒

當下朝良朝寧憲重の孝嗣を見く羞る色あり。孝嗣も亦去の折を以て  
 いま欲志の尋ねられども憚りあはれ外々。管待を致さの然る程の夕陰  
 西の斜めく法會の讀經果かば、大法師の身を起して船頭る餓饑架ふ  
 うも向ひく香を焼水を賻け眼を閉合堂して舊臘八日水陸三所を戰殺し  
 たる自他の萬靈施主里見殿の所願ふよりて經亮讀誦の利益違  
 へも往生得脱一蓮托生等見菩提と念下々且偈を唱る者五言四句  
 其聲清亮めく高けと上の紫微有頂天み届るべく下の金輪捺落す  
 安んずまむと思ふ可水と陸との衆人の愕然とらち驚くす心威眼も遠  
 長視る當下、大阿耨多羅三藐三菩提の識算む。數珠を取ら推搦  
 又偈を唱へ章を誦し念佛十遍聲の中み數珠をうち揮りうち拂ふ縦横を  
 尋の法力不奇く然かる識算の八の玉を串たし。數珠の緒弗と振断離られて



